

小説

# 小説・昭和天皇仙台巡幸

ゆとり 満

その日、東彦の所属する退職総連総会が横浜で開催された。彼は副会長の職にあり閉会の挨拶をする役割を担っていた。そして、総会終了後は、気の合った仲間たちと関内駅近くの居酒屋で杯を傾ける手はずになっていた。どちらかという総会よりこの会が本命と違ってよかった。無事に総会が終了し、いざ居酒屋へ、という段になって急に鋭い痛みが東彦の下腹部を襲ってきた。「石が動いている」と、東彦は直感した。東彦には腎臓結石の持病があり、年に数回このような痛みに襲われることがあった。痛みを抱えたまま宴会に出席し、仲間に迷惑をかけては申し訳ないと思い、東彦は泣く泣く幹事の須藤にこっそりと断りを入れ、地下鉄で帰路に就いた。電車に乗り込んだ時には「これ以上痛みが増さないように」と、必死の願いを心の中で

唱えた。師走の一五日の金曜日ということもあってか退勤時間にまだ間があるにもかかわらず電車は満員であった。こんな満員の電車の中で七転八倒の痛みに襲われたらどうしようかと思った。そう思うだけで顔に冷や汗がじんわりと浮かんで来た。東彦の異状を察したのであろうか東彦の前の大学生とおぼしき若者が「どうぞ」と席を譲ってくれた。「ありがとうございます」と礼を言い、身を縮めながらその狭い空間に身体を沈めた。目をつむり痛みを堪えた。ところが降車駅近くになると嘘のように痛みが消えてしまった。動いていた石が「落ち着き場所」を見つけたに違いない。このようなことはよくあることであった。「チェッ」と東彦は舌を鳴らした。「戻ろうか」と、「食い意地」ならぬ「飲み意地」の張った東彦は思ったが、あまり

に体裁の悪い振る舞いと、その思いを振り払った。そして自宅に直行した。玄関のドアを開け「ただいま」と奥に向けて声を出した。部屋の冷たい空気がわずかに震えたように見えた。趣味の活動で忙しく、また、夫の遅いことを知っていた妻はやはり留守であった。リビングに入った東彦はガスストーブを点け、テレビのスイッチを押した。ストーブの熱風がズボンの裾を揺らした。直に室内が暖かくなった。

「一っ、まるで他人事ではありませんか」と思わず叫んでしまった。そして「それはないでしょう、陛下。黒焦げのものはや炭化して横たわる死体や瞬時に蒸発し、影だけ遺して焼けた空中に気体と同化してしまった人への言葉ですか」。東彦は怒りよりも呆れてしまった。そして、突然、「陛下、陛下はご存じありませんが、遠い昔、私はあなたさまのお姿を目にいたし、驚天動地の言葉を発したことがございます」とつぶやいた。

「そう言えば明日も忘年会だ」と独りごちしながらコートを着たままソファに腰を下ろしながらテレビの画面に目をやった。なんとそこには崩御されたはずの昭和天皇の姿が映っていた。驚いて画面左上の文字に目をやると「原爆が遺した子らへ胎内被爆小頭児をささえて」とあった。「原爆の問題だな」と思いながら東彦はリモコンを引き寄せる」と音声を高くした。どうやら昭和天皇の記者会見のようだった。天皇が多くの記者の前でマイクに向かい記者の質問に答えている。「こんなフランクな天皇の記者会見もあったのか」と、東彦は驚きを隠せなかった。

昭和二年八月五日午後五時十分、昭和天皇（以下天皇）は、全国巡幸の目的地の一つである仙台駅に到着され、駅を出られた。その時の天皇の様子を河北新報は次のように報じている。

宮廷列車から出られた陛下の浅黒いお顔、ねずみ色の背広にカンカン帽、茶色のおくつ、左右に迎える人々に帽子を軽く取られてお言葉を賜りながらお召し自動車に乗られると萬歳の喚呼が渦を巻いた。西日がカッと照りつけてお眼鏡が光る。

「原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾に思っています、こういう戦争中であることですから広島市民に対しては気の毒ですが、やむを得ないことと私は思っております」

同じ紙面の別な記事では、

ねずみ色に細く白いしまのある背廣、チョコレート色の短ぐつ、紺に赤い花模様をししゅうしたネクタイを召されて陛下は懸廳（二階）バルコニーの白木の台に

立たれた。  
と記している。

この時、県庁前広場、大道路の南側に集まった市民は「二万余」と言う。また、巡幸時の天皇のトレードマークでもあったカンカン帽について「日に焼けていた」、そして「陛下のお顔も日に焼けていた。バルコニーで時間は一分であるが、その間二回静かに微笑された。唇から鈍く白い歯が見えた」と、微に入り細に入り描写をしている。天皇はこの日午前七時二十分に宮城を、同三十分で東京駅を出発、午後零時四分福島県湯本駅に到着された。その後オープンカーで沿道の奉迎者の喚呼に応えながら石城郡湯本町の常磐炭礦株式会社磐城礦業所に到着された。すぐに社長から、炭礦の沿革や配給事情をお聞きになった。そしてその後、一五〇〇尺(約四五四呎)の坑底に入り、炭坑夫たちを激励された。さらに仙台に向かう途中、石城郡内郷町の裁縫女学校前、平駅、原ノ町駅でも下車され町民や遺族・戦災者らの奉迎に迎えられた。この行程を見ると記者の「随分お疲れのように見えた」という記述には納得がいく。

東彦はこの天皇の巡幸を母に連れられて目に見ている。この時、母の背には九ヶ月になる妹の玲子がいた。母は親族や隣人たちと連れだつて奉迎の列に加わっていたのだっ

た。東彦には微かながらこの巡幸の情景が脳裏に残っていた。それは年と共に薄れていき、いずれ消滅するはずであった。しかし、なぜか母はこの時の奉迎の様子を折に触れて話した。その話の中には東彦のある行為が必ず織り込まれていた。そのたびに東彦は「また母の十八番が始まった」と苦い思いで聞いていた。その苦さのせいか微かな記憶は消えるどころかまるで釘付けされたように確かになつていった。

東彦の記憶に残る巡幸光景は、沿道にひしめく人々の群れとその群衆の背後に広がる白い瓦礫の連なりである。空襲で破壊されたビルなどの残骸である。透明感に満ちた空気が澄んだ青い空が広がっていた。日の光が瓦礫に言白く浮きだたせ、反射していた。と、脳裏には刻まれている。沿道に連なる人々は黒い塊で、表情などは少しも思い出せないのである。人々の連なりの狭間を黒い車の一団が通過していった。その中に帽子を振る男性の姿を東彦は見たのである。「現人神」であらせられる天皇陛下であった。その時、東彦の脳内を電流が走った。そして何かが破壊されたのである。思わず、

「天皇陛下に手があるう」

と、叫んだのである。

三歳九ヶ月の幼児が、である。

その大声に慌てたのは母親の由美である。出発前、長老

たちにくだいほど不敬なことをしてはならないと釘を刺されていたのである。三歳の息子がともあるうに天皇陛下に向かつて「手がある」なんて叫んでしまったのである。紛れもなく「天皇陛下さま」を冒瀆する言葉以外の何物でもない、「不敬罪だ」と、由美はとっさに判断したのである。そして、「東彦そんな大それたこと言うもんでねえ」。そしてもう存在しないはずの「憲兵さん」という言葉を使つて「連れていられるぞ」と言った。さらに東彦の左腕をぐいぐいと引つ張つた。そして、首をすくめながら周りをそっと見回した。しかし、周りを囲むようにして立っている人々から叱責の言葉など一つも飛んでは来なかった。それどころか、由美たちに関心を持つ者など誰一人としていなかった。誰もが、通過しようとしている車列に「万歳万歳」と身を投げ出すように、あるいは背伸びをしながら大きく叫んでいたのである。由美の心配は全くの杞憂であった。

不敬罪については昭和二二年十月に刑法から削除されている。また、前年の二一年一月一日に出された詔勅の中で「天皇の神格」は否定されている。いわゆる「天皇人間宣言」である。しかし、昭和二二年の五月十九日の「米よこせメーデー」で松島太郎が不敬罪で逮捕、起訴されるという事件が起きている。結局は最高裁で免訴になったが、当時大きな反響を呼んだ。容疑は掲げていたブラカードの文

言にあった。その表面には「詔書 國体はゴジされたぞ朕はタラフク食つてるぞ ナンジ人民は 飢えて死ぬ ギョメイギョジ」そして裏面には「働いても働いてもなぜ私たちは飢えねばならぬか天皇ヒロヒト 答えてくれ 日本共産党田中精機細胞」という内容である。当時、この事件は大きく報道されたから由美の耳にも入っていただろう。茶飲み話でもひそひそと語られたかもしれない。このブラカード事件は「最後の不敬罪」であった。しかし、由美たち庶民には戦前の恐怖を持って語られていた不敬罪とこのブラカード事件の不敬罪が重なり、この罪名はなお強固に脳裏に植えつけられていたことは間違いない。

後年、母親からこの巡幸時の「叫び」を聞くたびに東彦はあまりよい思いをしなかった。同時に、彼の記憶である「太陽の光線が瓦礫に反射し、周りを白くした光景」と、当日の実際の天候の違いについて思いをいたすようになった。その違いはどこから来ているのかと。巡幸第一日目は青空が時折見える天気であった。二日目は午前中が小雨で午後から曇りであった。どちらも東彦の記憶の天候とは違っていた。記憶というものは曖昧さを持つ。時が経るにつれその曖昧さは増していく。しかし、「白い瓦礫の風景」は確かな記憶と東彦は信じていた。しかし、調べていくうちにそれが天皇巡幸時の天候ではないと言うことが判明した。では一体それが何時のことだったのかと問われる

と急に自身がなくなるのであった。三歳の幼児が一人で都心まで外出などするはずもない。行くとしたら必ず母親か近親のおとなが一緒であったはずである。そのような機会があったのか、母親の由美に問えば判明することであるが、しかし、その母親は既にこの世の人ではなかった。

宮城県巡幸初日である五日の日程、並びに情景は次のようなものであった。

午後五時十分仙台駅に到着された天皇はすぐにお召し自動車に乗車され「津波のように押し寄せる群衆」の中を花京院通から錦町を経て宮城県庁に到着された。「ここでも万余の群衆」であった。バルコニーに立たれた天皇は帽子を取り、手を挙げて市民に応えた。天皇を一目見んと集まった群衆の中には県庁の屋上や木の枝に登り、天皇を見下ろす者もいた。招待された高齢者の一人は「このような奴がいよとは思わなかった」と嘆いていた、と地元新聞が伝えている。その後、千葉知事、岡崎市長からお話を聞かれて再びお召し自動車の人となられた。そして午後六時五分、宿泊先の仙台市南小泉一本杉の旧仙台藩主伊達邸に到着された。

この間の経路は清水小路、荒町、二百人町である。清水小路の「小路」だけを読むといかにも細い小道のように思えるが実際は国道四号線のメイン道路である。現在は、仙

台駅方面と県庁・市役所方面から車が流れ込み、ラッシュが終日続く状況である。この大動脈となった清水小路とは、藩政時代は中級武士の住む侍屋敷が並ぶ静かな町であった。そして、大正末期までは五橋交差点の東北角付近に大清水と呼ばれる清水があり、ここから清水が豊富に湧き出たと言う。今ではとても考えられない風景である。これからわかるように地名の由来はここに湧き出る清水よるものであった。この清水小路を南へ少し進んだところを左折すると荒町になる。荒町通りはこの交差点から東へ約二百メートルの間となる。藩政時代は奥州街道の本筋であった。この街は昔から麴や団扇の生産や販売で知られていた。商店が軒を連ね、信仰を集める毘沙門天もある。

天皇は「五彩の吹き流しの林立する飾りの中」を、やはり立錫の余地なく集まった市民の歓呼の声に応えながら通過していった。この日の七夕飾りは天皇の巡幸に合わせ、市内中心街で五千本の竹飾りが並べられた大規模のものであった。六日付地元新聞掲載の写真をみると十倍以上はあろうかと思われる大きな竹飾りが道路の両端から斜めに天上を覆っている。吹き流しがわずかに横に流れているので微風と思われる。その下を車列が通過している。車は五台まで数えられたが、その後にもまだ車が続いているように思われる。通常の車列は御料車（天皇が乗車）と前後二両ずつの供奉車の計五両からなる。この時の車列には県ある

いは市の車両が加わっていたと考えられる。従ってこの時の総計台数は六、七台かと推計される。この時の御料車の車種はメルセデス・ベンツ770Kではないかと思われる。戦前ドイツから七台輸入されている。そのうち一台は戦時中に戦災消失した。「赤ベンツ」の愛称で親しまれていたと言う。また、巡幸でも使用されたと言うから、仙台の街中も走ったと考えられる。新聞写真の車列の先頭車をよく見ると、ルーフの全面両サイドに突起のようなものが見える。これがそのベンツに酷似している。

幸い荒町地区は空襲を免れた。商店主たちが中心になって七夕飾りが作られた。仙台商人の心意気と市民の天皇歓迎の熱い気持ちとが合体したものと言える。巡幸の前年昭和二年七夕祭りが復活している。戦況が激しくなった昭和一年、一九年はいくつかの飾りが商店街で見られただけで、ほとんど飾られることはなかった。敗戦後の翌年、一番丁通の焼け跡に五二本の竹飾りが立てられた。「涙の出るほど懐かしい」という市民の声が地元新聞に掲載されている。この七夕飾りもやはり一番丁商店主たちの努力と心意気の発現であった。

荒町を進む車中の天皇がこれらの七夕飾りにどれほど気付かれたかは不明である。しかし、新聞掲載の写真を見ると、お召し自動車は「両側の家並みから垂れ下がる五彩の吹き流し、銀の短冊、千羽鶴・・・降るような花吹雪の

中」を徐行しながら進んでいった。このことから推し量るにフロントガラスを通し、あるいはサイドの窓越しに天皇はこれらの七夕飾りを見ていたに違いない。

天上に五色の綾どり、そして、人垣でぎっしりの沿道からは人々の万歳の声が津波のように湧き起こった。これらの人々の大多数の心情は心から天皇を崇敬し、その気持ちに「万歳」という叫びに集約されていたのではなからうか。その市民の歓呼の声を後にしてお召し車は南小泉一本杉の宿泊所である旧仙台藩主家邸に六時五分に到着した。まだ陽は落ちず、仙台城趾のある青葉山が文字通りに緑一色に映え、その背後に連なる奥羽山脈の山並みがわずかに顔を見せ、薄紫に霞んでいた。焼け残ったビル以外、大きな建物は無い仙台市中心部が一望に見渡せる広大な情景は何やら異次元の世界のようでもあり、異国の地のようにもあつた。無残な風景でもありながら、人々は太古の無人の光景を容易に偲べる幸せに一時浸ることも可能であった。

宿泊所となった旧伊達家邸は、現在聖ウルスラ学院に変わっている。学院校内には地名にもなった老杉が健在である。この老木は数百年の樹齢を持ち、遠く四方から認められたと言う。今となつては貴重な伊達家ゆかりの樹木と言つてよい。ちなみに天皇は「御夕食の際に仙台煮付・笹蒲鉾・鮎味噌田楽・ほやの酢の物などの郷土食を召し上」がった。地元新聞には、他に白石そうめんが記されている。

仙台巡幸二日目である六日は「午前中りん雨さえ降り、午後もどんよりと曇っ」ていて、前日の酷暑と打って変わりに「暑さ忘れる絶好の巡幸日和」であったと言う。しかし、仙台近郊やさらに遠方から駆けつけてきた人々にとつては必ずしも絶好の日和とは言えなかったかもしれない。新聞の写真で見る限り高齢の方の姿が多く写っている。このような方々にとつては小雨とは言え、何かと不便なことがあったのではないかと推察する。巡幸二日目の仙台市内移動はオープンカーを使用する予定であったが、雨天のため通常の自動車で目的地へ向かっている。

翌朝、天皇一行は宿泊所の伊達家邸を八時に出発した。来た時の逆コースで荒町、清水小路、仙台駅前、錦町、そして宮城県庁の西横を走る勾当台通から北仙台駅西にある長生園、仙台更生寮に向かう。長生園には八時三五分に着している。園と寮の視察を終え八時五五分に出発し、木町通小学校を訪問。隣接する第二中学校の授業の參觀と校歌の合唱を聞かれる。その後、校庭で仙台市内小中学校児童代表の歓迎を受けられている。さらに担任教師が東北少国民歌等に振り付けた女子児童の舞踊が披露されている。まだ「少国民」は健在であったのである。ここでの滞在は三〇分であった。その後、東北大学金属材料研究所の視察をされ、仙台市内最終目的地である仙台病院に向かわれる。

途中、東一番丁、名掛丁を通られる。この間の情景を河北新聞は次のように伝えている。

仙台市の陛下をお迎えする狂熱ぶりは前日にも増して白熱化し、陛下のお顔に接しようとする市民は沿道に黒山の人垣をつくり幾十数万を数えた、市民の熱狂は夥しい花吹雪等にうずもれ東一番丁、大町、新伝馬町で頂点に達した。陛下のお車がお通りになると声は潮となって打ち寄せ、打ち返し五彩の吹き流し、短ざくなどが霧雨の中にはらはらと散っていた。(作者注 旧漢字は新漢字に直して引用)

新聞記事というより小説の情景描写のようで、情感たっぷりと表現されている。この記事を読む限り、一部にあった「天皇の戦争責任論」を追及する声や「退位論」を迫る要求など微塵も読み取れない。それどころか「全国を隈なく歩いて国民を慰め、励まし、また復興のために立ち上がらせるための勇気を与える」という天皇の全国巡幸の目的が十二分に実現されているように思われる。その上東北巡幸について、当初は天皇の静養のために「九月に入ってから涼しくなってから」という予定であったと言う。また、六月、七月にかけて東北地方は長雨に見舞われ、さらに水害に襲われ、巡幸の延期もやむを得ないと言われていた。ところ

が天皇は、むしろ水害を見舞いたいとの熱意を示され実現した。このような天皇の熱意や責任の強さも東北の人々に伝わって「狂熱ぶり」というような情景が現出したのかも知れない。行く先々での国民の天皇に対する手放しの礼賛、傾倒、熱狂ぶりは明治以来の国家の天皇崇拜政策、教育だけでは説明しきれないものがある。

もし、説明しようとすればGHQの「民衆は、政治的につくられた神聖君主としての天皇ではなく、大いなる力や威霊をそなえているであろうものについてのあわい期待でもって天皇を意識した」が的を射ていると考えられる。ただし、明治憲法の「天皇は神聖にして侵すべからず」という文言が、国民の意識の中にすみつき、肥大化していったのではないかという考えも否定できないかもしれない。特に昭和に入ってから軍国主義が強まるにつれ天皇崇拜、戦争礼賛は社会のあらゆる機構を通じて強められていった。それを主導していったのは、軍であった。軍は国家神道を強力に推進し、強烈な思想統制・言論統制、報道規制を行い、全てが天皇の御為にと言う形に収斂させていった。国民は否応なしに天皇礼賛、戦争礼賛の下り坂を走らされていったのである。政府・軍部はアメとムチでもって国民を飼い慣らしたとも言えるのかもしれない。

国立仙台病院到着は十時三五分である。伊達邸出発から二時間三五分経っている。この間訪問箇所は四箇所である。

相当なハードスケジュールと言え。その後、天皇は塩竈魚市場の見学、松島瑞巖寺での昼食、そして女川町に入られた。女川魚市場ではカツオの水揚げ状況を視察された。そして折から入港してきたカツオ漁船の船長・船主に「たくさんとれたね、どのくらい出たか」「これからも頼む、たくさんとってくれ」と激励をされている。船長の驚きは半端ではなかっただろう。ついこの間まで現人神であった。庶民感覚では生き神様である。いくら「人間宣言」をしたと言っても庶民の意識、感覚には依然として生き神様で占められている。しかもこの船長は漁から港に戻ったばかりのことである。おそらく「呆然」として返事もままならなかったと思う。しかし、この船長やその家族にとつては終生忘れることのできない慶事であり、名誉であったろう。その喜びは時間と共に湧き上がってきたに違いない。

このような市民とのふれあいは巡幸先々であった。最初の巡幸地であった川崎市昭和電工川崎工場では、天皇から言葉をかけられた女子事務員は「はい、と答えるだけでもうドキドキして、ぼーっとしてよく覚えていません」と後日述べている。

また、東彦の叔父は国鉄当時、蒸気機関車の機関士をしていたが、お召し列車の運転捧命を受けたことがあった。そしてセンチ単位の狂いもなく停車位置に列車を停止させたとする。そのことは彼にとつては終生の名誉であり、誇

りであった。酔いが回るとよくその話をした。昭和三十年代のことであるが、庶民にはまだまだ天皇は敬仰の存在であった。ましてや敗戦直後とは言え昭和二十年代は天皇崇敬の念は強かったに違いない。

女川漁港では天皇は、水揚げのことなど詳しく尋ねられた。生物学者としての興味、関心がそうさせたのであろうか。県庁でも岡崎市長の「あれが齋藤報恩館です」という説明に「そう、標本があつたね、どうしたの、焼けなかつたの？」と即座に返されている。天皇が指しているのは「齋藤報恩会自然史博物館のことである。現在は解体され場所が移動しているが、昭和八年に開館し、貝類や魚類、恐竜の化石標本、鳥類の剥製を収蔵、展示していた。とっさに「標本」の安否を問われたのは生物学者という天皇の面目躍如とも言える。

この地でも沿道の人垣の中を徒歩で町民に帽子を振りながら女川駅まで向かっている。

「特に引き揚げ者、戦災者席の人たちには優しいお言葉をかけ」ておられた。この巡幸では天皇と市民の距離の近さが際立つ。それは、天皇の「国民の中に溶け込もう」という気持ちが強かったから、あるいは「溶け込まそう」という意思が働いたからと言えるのではなからうか。この巡幸の間、天皇と国民の距離は極めて近かった。というよりゼ口に近い場面もしばしば見られた。あるところでは天皇は

群衆にもみくちゃにされ、上衣のボタンが取れ、靴には踏みつけられた跡が残ったほどである。町民の万歳の声に送られ、歓呼の中古川駅に到着されたのは午後五時五十分であった。その後、直ちに宿泊所の古川高等女学校に入られた。巡幸中の宿泊所は、お召し列車の中、学校、公民館、豪農の家などが多かった。学校などでは床にござを敷き、その上に布団を敷かれたと言う。この時、天皇は四六歳「働き盛りの年齢」とは言え、宿泊にもご苦労があつたと推測される。翌朝、天皇はお召し列車で古川駅を発ち、岩手へと向かわれた。

天皇が全国巡幸を始めたのは昭和二十一年二月一九日からであった。沖縄以外の全国を約八年半かけて回られた。行程三万三千<sup>キ</sup>、総日数一六五日、立ち寄り箇所は一、四一箇所にと及んだ。最初の訪問地は川崎市にある昭和電工川崎工場であった。この工場では食糧生産に不可欠の化学肥料を生産していた。この頃、日本は戦いに敗れた虚脱感と、食糧難にあえぐ日々で、明日食べるものさえなくて、一億国民は飢餓状態に陥っていた。天皇が巡幸最初の地を化学肥料工場に選んだのはこういう背景もあつたと思われる。

戦後の食糧危機は構造的な問題を含んでいた。一つとしては、敗戦で食糧基地であつた朝鮮、台湾、満州を喪失したことである。二つ目としては農業資材、農業労働力の不

足・作付面積の減少が挙げられる。これらの要因が国内食糧生産の大減産につながっていった。また、敗戦の混乱で国家権力の失墜、闇取引による農家からの食糧供出量が激減した。さらに海外からの引き揚げ者（一五〇万人）による消費人口の拡大である。その上悪いことに自然災害が国土を襲った。敗戦の年の九月七日に枕崎台風、十月九日に阿久根台風という強烈な台風の襲来である。この両台風により、九州、四国、近畿、北陸、東北地方に至る日本全土に爪痕を残す大きな被害が発生した。米の収穫量は明治三八年以来の大凶作になった。二一年の春の麦も凶作であった。こうした事態を受け、敗戦の年の暮れから始まった食糧運配は、二一年に入るとさらに深刻化し、大都市で「米よこせ運動」が頻発した。二一年五月、皇居前広場で二五万人を集めた「飯米獲得人民大会(食糧デモ)」もその一つであった。また、不幸な事件も多発した。米の購入や就職を口実に十人にのぼる女性を暴行・殺害した小平事件もその一つである。また、闇米を拒否し食糧管理法に沿った配給食糧のみを食べ続け、三三歳で栄養失調で死した「山口良忠判事餓死事件」などである。いわば物情騒然とした世相の中で巡幸はスタートしたのである。

このような世情の中、天皇はなぜ全国巡幸を始めようとしたのであろう。その問いに答える一つが連合国軍総司令部(GHQ)最高司令官マッカーサーとのいわゆる「歴史的

会見」と言われた際の会話の中にある。敗戦から一ヶ月余経った昭和二〇年九月二七日のことである。

「私には失意と虚脱にあえぐ国民を慰め励ましたいので、日本全国をまわりたい。しかし、一部に反対の声があるのだが・・・」

天皇のこの言葉に、  
「遠慮なくでかけるべきです。それが民主主義というものです」と、マッカーサーは答えたと言う。

マッカーサーから「内諾」を得、意を強くした天皇は、翌月宮内省次長加藤進に、

「この戦争によって先祖からの領土を失い、国民の多くの生命を失い大変災厄を受けた。この際私としてはどうすればよいのかを考え、また退任も考えた。しかし、よくよく考えた末、この際全国を隈なく歩いて国民を慰め、励まし、また復興のために立ち上がらせるための勇気を与えることが責任と思う。このことをどうしても早い時期に行いたいと思う。ついては、宮内官たちは私の健康を心配するだろうが、自分はどんなになってもやりぬくつもりであるから健康とか何とかは全く考えることなくやってほしい。宮内官はその志を達するため全力を挙げて計画し、実行してほしい。」

と話し、準備を命じる。この言葉には天皇の巡幸の目的と実行の強い意志がはつきりと読み取れる。しかし、怪訝

に思うのは先祖からの領土を、また三一〇万人もの国民の生命を失い、かつ家屋を始めとした数え切れないほどの財産を喪失させて敗戦に至らしめた大元帥としての責任の釈明なり謝罪というものが込められていないことである。それを表明すれば「退位」につながるかと考えられたのである。しかし、「判官贔屓の国民性」を考慮し、巡幸の先々で奉迎した国民に対し率直に謝罪の気持ちなどを述べたならば、むしろ天皇崇拜の国民感情はより高まったのではないかと推察される。残念なことである。

この巡幸開始前、天皇と側近は「国民に石もて迎えられないか」と危惧した。しかし、仙台での市民たちの熱狂的な歓迎と同様なことが向かう先々で起こったのである。大阪や福島では「天皇のお姿を一目見ん」と押し寄せた群衆にMPが空砲を撃つてようやく鎮めたと言う。天皇及び側近の心配は杞憂であった。

それにしても敗戦からわずか六ヶ月経ったばかりの時期に巡幸は開始された。日本中のほとんどの都市が空襲という絨毯爆撃を受け瓦礫と化してしまっている状態なのである。そればかりでない。戦死、戦災者は数知れない。いわば裂けた傷がふさがらず血がタラタラと地面に垂れている状態というのが多くの国民の気持ちだったろう。全国巡幸という発想は常人ではとても出てはこないと思われる。

天皇の戦争責任を問う声も少なからずあった。この戦争の際にその気持ちを表明されたなら、すくなくとも官僚などの責任感をもっと強まっていただろうと推測される。

また、これはこの問題にかかわる重要なことであるが、それは昭和二〇年九月二七日の天皇とマッカーサーとの会見時における天皇の発言と伝えられているものである。それは

「日本国天皇はこの私であります。戦争に関する一切の責任はこの私にあります。私の命において全てが行われましました。日本にはただ一人の戦犯もおりません。絞首刑はもろんのこと、いかなる極刑に処されても、いつでも応ずるだけの覚悟はあります。しかしながら、罪なき八〇〇〇万人の国民や、住む家なし、着るに衣なし、食べるに食なき姿において、まさに深憂に耐えんものがあります。温かき閣下の配慮を持ちまして国民たちの衣食住の点のみ、高配を賜ります。」と、述べたとする。この二人の会見内容については日米両政府とも公表はしていない。しかし、この天皇の言葉が真実とすれば誠に潔く、かつ国民を思う英明なる君主と言える。後の記者会見の「文学問題」に収斂させた言葉とはあまりに乖離があると言えよう。それにしてもこの問題は国民の、そして世界からの大きな関心事であった。それを「文学問題」に矮小化してしまったことにはやはり納得のいかない、そして落胆した国民は多かったに違いない。誠に残念なことである。

責任については、一九七四（昭和四九年）年十月三十一日、

訪米から帰った天皇が日米記者クラブで、初の公式記者会見をした折にその質問が出されている。記者の「戦争責任についてはどのようにお考えですか」という問いに、天皇は「そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないので、よくわかりませんが、そういう問題についてはお答えができません。」と答えている。これに対し、「戦争責任を「言葉のアヤ」と解し、『文学方面』の問題と茶化したような不真面目でしらを切った返答をし」たなどという批判が起こった。他方、天皇を擁護する意見も出された。「そういう言葉のアヤについては（『私が深く悲しみとするあの戦争』という発言が戦争責任を認めたことになるかについて）私はそういう文学方面はあまり研究していないので、よくわかりませんが、そういう問題についてはお答えができません」という意味であると言うのである。確かに、戦争責任については米国の戦犯が協力して天皇を守り、「昭和天皇には戦争責任は無かった」としている。また、もし戦争責任を認めたとするならば「東京裁判や処刑された戦犯はなんだった」ということになってしまう。天皇は自らの発言で混乱を招くことを回避されたとも考えられる。それにしても「責任は十分感じている」という天皇が国民に向かって明

さらに、巡幸開始時期「米よこせデモ」にも見られように生命の危機という状態の国民も多く、世情は至って不安定で不穏な動きすら見え隠れする状況であった。それにもかかわらず天皇はもみくちゃにされるほどの歓迎を受けたのである。理屈では説明できない紐帯のようなものが天皇と国民の間にあるとしか考えられないのである。

東彦の母、由美たちが天皇の巡幸を見に行つた日時は明確ではない。おそらく五日であったろうと推測される。この日、仙台駅に天皇が到着されたのは午後五時過ぎである。野良仕事をいつもより早めに上がり、準備すれば間に合う時刻である。一般的に農家の嫁には自由に外出するなどという権利はなかった。多くの女性は小さな、閉ざされた村の中で生涯を閉じていた。しかし、この度の天皇奉迎は別であった。村役場からの奨励も追い風となっていた。彼女たちは早い時期から仙台に出かけられることに心を弾ませていた。まして今回のことは天皇陛下をお迎えするという前代未聞の慶事であった。期待と同時に晴れがましきも心の中には湧き上がっていたのだ。どんなに頑迷な舅や姑であっても彼女らの外出を止めることはできなかった。もし「阻止する」ようなことがあれば逆にその舅や姑が村から「不敬な輩」と糾弾されかねなかった。

由美の住まいは郡山矢口というところであった。東北本

線が三角形の底辺とすれば名取川と広瀬川が右辺と左辺と言える。この三角形のエリアが郡山地区であった。この郡山には西外れから矢口、台畑、矢来、竈の瀬、北目などの地区名が見られる。弓矢づくりや箆づくりという生業とながりがあり、藩政時代の名残が濃厚とも言える。北目には北目城があった。城主は栗野氏で、その後政宗が入城し、仙台城が完成する前一年ほど住んでいた。由美の母親ハルの実家が北目にあった。この家に政宗が狩りの時などに休憩をしたという話が伝えられている。そんなこともあってのことであろうか、西南の役では、ハルの叔父が仙台藩士として薩軍に参加し、戦死をしている。この郡山地区は昭和三年に長町とともに仙台市に編入されている。戦争機運が濃くなった昭和十年代頃、東北本線沿いにゴム工場、石油基地、煉瓦工場、東北金属などの工場が農地を格安に買い上げてできた。しかし、このことを除けば田や畑が一面に広がる豊かな田園地帯であった。

この夏は天候不順であった。東北地方は六月二日から豪雨で多くの被害を受け、国道も各所で普通となった。雨がじめじめと降り続いた。このため、天皇は古川宿泊所で催される予定であった郷土舞のさんさしぐれや虎舞などの鑑賞を取り止めた。長雨は人々の気持ちを不快にする。農民にとっては死活にかかわってくる。天皇の奉迎は、こんなやり切れない由美たちの暗い気持ちを引き飛ばしてくれ

そうだった。農家の女性、特に嫁たちにとり朝起きてから就寝するまで一時も休むことのない連続である。朝日が登る前に起床し、家事や育児をし、それを終えると共に野良仕事に出る。日が暮れる少し前に家路へと急ぐ。家に到着するや否や井戸端で手足を濯ぐとすぐに炊事仕事に取りかかる。幼子がいればその世話もしなければならぬ。家事の合間に洗濯物を取り込む。コマネズミのように働いた身体が床に就くのは寝静まつてからのことである。盆や正月、村祭りの日であっても野良仕事がないだけで他は同じである。こういう多忙な生活が延々と続くのである。だが、この変化のない単調で、少しも潤いのない生活に突然僥倖が降って湧いてきたのである。

五日と六日、陛下が仙台市内中心街を巡幸するという話は、あつという間に村中を駆け巡った。そして格別事情がある者を除いてできるだけ奉迎に参加しなさい、というお達しがあったのである。嫁や主婦たちにとっては願ってもないことであった。ほんのわずかでも野良仕事から離れることができるし、その上、「仙台」にも行けるのである。空襲で全滅したという話は聞いてはいてもやはり都心である。田畑ばかりで何の変哲もない郡山とは違うだろうと、村人誰しも思うのである。日常から非日常への飛翔は誰にもある願望である。

彼女たちの念頭に最初に浮かんだのは「何を着ていく

か」ということであった。女性にとってはいつの時代も変わらぬハレの日の「楽しい悩み」である。しかし、農家のおなごたちにはたいした悩みではなかった。もともと選ぶに悩むほどの着物の数を持ち合わせていなかったからである。ただ儀礼的と言うか習慣的に脳裏を走ったに過ぎない問題は天候であった。乳児を含めた子どもたちを連れていかなければならない。雨天だけはどうしても避けたかった。しかし、農民や漁師は天候に聡い。それは先祖代々受け継がれてきたDNAによるものでもあった。それに加えての彼らの経験である。風の動き、その臭い、そして雲の流れを基準にして判断した。大きな読み誤りはなかった。こういう時には年寄りの出番であった。彼らは仙台市内巡幸の第一日である五日が雨降りでないことを予測した。この日、天皇のご一行は五時十分きっかりに仙台駅を出た。そしてお召し車に乗ると直ちに県庁に向かった。県庁からは仙台駅前、清水小路、荒町を時つて南小泉一本杉にある伊達邸へ向かった。この順路は「仙台市内御道筋」として時刻も含め詳細に地元紙に掲載されていた。由美たちはこの行程に合わせて出かける予定を立てた。

この日の最高気温は三一度、最低気温は二二度であった。これまで長雨や低温が続いたこともあって殊の外蒸し暑く感じられた。新聞には「酷暑」とさえ報じられたほどである。日没は午後六時四三分であった。当時、由美たちが都

心に出るアクセスは自動車か市電であった。そのうちで馴染みがあつてお手軽感のあつたのは市電であった。由美たちはこの市電を利用し、天皇ご一行が伊達邸へ向かう途中の荒町近辺で奉迎しようと考えた。長町駅前が市電の終、始発停留所であった。この停留所まで自宅から徒歩十五分、子ども連れでは三〇分ほどの距離であった。由美は長男で三歳九ヶ月の東彦の手を引き、背中に九ヶ月になる娘の玲子をおぶっていた。当然ながら兄嫁の里久一家も一緒であった。その他に隣近所の人たちも一緒であった。里久の子どもが一番年長は十七歳になる十和子である。里久には力強い存在であった。十和子の下に四人の子どもがいた。十四歳、十二歳と続き、その下に東彦と玲子と同じ年齢の子がいた。由美の母で里久の姑であるハルも勇んで同行した。これだけの人数で人混みの中に行くとなると何かと気遣いが入ったのは当然であった。

当日の列車や市電の運行は臨時ダイヤだっただろう。特に巡幸の通過時間帯前後は運行の中止が行われたに違いない。おそらく前後二時間ほどは運行が中止されたと思われる。従って、由美たちの一行もそれに合わせて計画を立てたと思われる。巡幸の一行は仙台駅を五時一〇分に出発し宮城県庁で市民の奉迎に応えた後、宿泊先の伊達邸には六時六分に到着している。市電を利用して奉迎に向かうとすれば五橋停留所で下車するのが最適であつたろう。そして

巡幸の列が左折する荒巻辺りを奉迎の地としたと考えられる。この辺りを巡幸の列が通過するのは五時頃とされる。電車の運行中止を考慮に入れると三時半頃までには現場に到着しなければいけないことになる。逆算すると自宅を二時半には出発し、長町停留所では三時頃に電車に乗車するとぎりぎり間に合う計算である。

巡幸の奉迎の準備は官民一体になって取り組んだ。巡幸の車列が通過する道路はどこも掃き清められた。ひよっとすると奉迎の場所も地域ごとに指定されていた可能性がある。また、新聞記事に「招待された高齢者の一人」とあるように、ところにより招待席も設けられていた。招待された人々の多くはネクタイを締め、背広を着用していた。紋付き羽織着用の人もいたと思われる。また、埼玉県埼玉村（現行田市）の農業をしていた新井ハル子さんは村役場の人から「天皇陛下が来られるからかすりのモンペ姿で農作業を見せるように」と依頼されたと言う。これは一種のヤマセの要請である。少しでも天皇に喜んでもらいたいという官側の必死の思いと解釈できる。そしてそれにしっかりと応えようとする民側の意思もあつたと見るのが妥当であろう。さらに、「日の丸の旗を振らない」という指示もあつたのではないかと思う。これは占領軍側の日本観を示す象徴的なことである。GHQは当初、天皇制の復活や再

軍備を極度に恐れていた。従って占領以来、日の丸の掲揚を禁止していた。巡幸においても国民が旗を振って天皇を迎えるのを禁止していた。しかし、実際は、巡幸の先々で日の丸が振られた。行列など何かにつけて日の丸を振ることは国民の習性になっていった。規制をされてもこの行為は自然発生的に起こったとも考えられる。

昭和二年一二月の中国巡幸のことである。中国地方から還幸途中にお召し列車が兵庫県を通過した時に予期せぬ事態が起こった。沿線の多勢の人々がお召し列車に向かって日の丸を振ったのである。この巡幸にはGHQの民政局のポール・J・ケントが巡幸のお目付役として同行していた。彼は天皇制復活を警戒していた一人だった。ケントは「日の丸厳禁」の禁則が破られるのを目の当たりにして激怒し、巡幸の中止を民政局に具申ししたのであった。これを受け「占領統治を円滑に進めるべく許可したGHQだったが、国民のあまりの熱狂ぶりに日本が戦前の皇国体制に戻ることを」懸念し、巡幸は一時中断されたのである。この背景には、当時、極東軍事裁判の最中で天皇の進退問題なども浮上してこともあつた。しかし、冷戦の進展に伴うGHQの占領政策が転換したことや天皇自らが再開を熱望したこともあり、一年後の昭和二三年から再開された。

農村共同体では村落の行事などは慣習に従うと同時に入念な話し合い・根回しなどの「寄り合い」の元に行われるの

が通例であつた。時代が下るとともにこの慣習などは希薄化していった。しかし、昭和二十年代はこれらのことは厳然として存在していた。また、戦中の「隣組」のような村民を結びつける紐帯は極めて強固で、さらに「大日本婦人会」の機能はまだ残っていたらうから、それだけに統制も容易であつた。天皇の巡幸は、早くから新聞やラジオで報道されていた。「一九四一年のラジオ契約数は六百万件普及率四六％で二件に一件ラジオがあつた計算になる」（東大教授加藤陽子氏）。また、「日本の新聞購読者数は同時代の他国と比べて非常に多かつた」（同上）、ということからも官報情報はかなり詳しく、しかも満遍なく国民に伝わっていたと考えられる。おそらく、巡幸を迎える際の注意事項の中に「日の丸携帯禁止」も含まれていたに違いない。当時の新聞記事にも「君が代合唱」や「津波のように起こる万歳」という表現はあつても「日の丸」の文字は見当たらない。ただし、実態は違つていたかもしれない。自然発生的に日の丸を振る光景はあつたらうと推測される。そこには「天皇への儀礼、尊崇」、また敗戦として占領という敗北感の中で「自己確立、自己存在の確認」を日の丸に求めるといふ心情もあつたのではないかと思われる。それは抑えがたい民族意識につながっていくものであろう。

しかし、由美たちにはそこまでの意識はなかつた。「触

らぬ神に祟りなし」であり「長いものには巻かれる」という従順な意識にきれいに染まっていた。「お上のお達し」に抵抗するなどという「畏れ多い」ことなどいささかもなかつたのである。「巡幸奉迎」にどう対応するか、という話し合いは隣組同士で行われた。隣組と言っても都市部とは違つて構成委員である村民は散在していた。声をかければ応えるという距離ではない。それぞれ標準三反歩・九百坪の敷地の中に居宅などの建物があり、それ以外の土地は畑であつた。その敷地を「いぐね」という屋敷林が囲んでいた。隣家の小林家とはお互いのいぐねと畑によって隔たれ、なおかつその間を小川が流れていた。両母屋は直線距離にすれば二百メートルほどであるが実距離はそれより百メートル長かつた。村民は家長の小林一之助さんを小林のじいと敬愛を込めて呼んでいた。向かいの家は馬方（馬車引き）の阿部乙吉、通称馬方の乙つつあんであつた。その隣が竹屋の安斎宗助、通称竹アンさん、そして西隣が農家の荒川熊二郎、通称荒熊さんであつた。この四世帯と由美と由美の実家の二世帯を合わせた六世帯が隣組であつた。六世帯と言つてもそれぞれの世帯の家族数が多いので結構な人数になつた。全体に農民は保守的で警戒心が強く、さらに保身に長けていると言われている。母や祖母の言動を見るにつけそれは一面で正しいと思われる。半面、土地に対する執着は強く、また好奇心の旺盛な面も見られた。東彦の先祖



がいつのころからこの土地に住みついたかは定かではない。しかし、寺に残された過去帳をたどると寛政時代までさかのぼることができる。かなり古くからこの地に居着いていたことが推測される。もともと郡山は歴史が古く、七世紀半ばの大化の改新のころ官衙(役所、官庁)や寺が創建された。多賀城の前身基地と考えられ、古代国家成立期における東北地方の政治、軍事の拠点と考えられている。東彦の先祖がこの中央政権に従事していた人となつていかどうかは不明だが、昭和の終わりまで嘗々と農民としてこの地に根を生やして来たわけであるから、その精神は全くの農民仕様と言つてよいであろう。それは端的に言えば支配層からの締め付け、強要から何とか永らえるという一点であろう。「忍従」こそが彼らの精神の中核であつたに違いない。

京都の人たちは昔から天皇を隣人か親戚のように親しみを込めて「天皇さん」と呼んでいた。ところが東北の農民・庶民たちにとつて天皇という言葉や存在は明治維新以降になつてから耳にし、知つたのである。それ以前は、藩主が彼らの絶対君主であり、また、身近には庄屋や地主が彼らの直接的な支配者であつた。天皇は無縁の存在であり、京都人、関西人とは距離感、密度が全く違つていたのであつた。明治政府にとつて、このような状況は由々しきものであつたに違いない。しかも当時の世界状況は厳しく、

アメリカを始めロシアなどが日本を支配下に収めようと虎視眈々と狙つていた。また、国内的には新政府の基礎が固まらず、自由民権運動が展開するなどの不安要素があつた。そのため揺るぎない統一国家建設は愁眉の課題であつた。また、国民の国家意識と忠誠心の形成が喫緊の任務であつたろう。まさにその要が天皇の存在であつたと思われる。だからこそ政府は、明治の初めから十年代にかけて民衆に天皇の存在を知らしめ、その権威を見せつけるため全国巡幸を実施したのである。全てで九七件(うち、即日還幸三七件)である。この行幸を通し、政府は「国家支配のシンボルとしての天皇像を民衆に浸透させ、民衆の生き神信仰と天皇とを結びつけて神権的粉飾を進めた。また、それは天皇を迎える地方官の権威を高めると同時に、天皇が休憩・宿泊で立ち寄る地方行政機関や地方名望家の地方支配を強固なものとし、さらに陸軍の大演習と関連づけることによつて天皇と軍部とを直結させる役割などを果たした。その意味で明治天皇の地方巡幸は、近代天皇制の確立・完成過程における国家的プロパガンダであつた」。(日本大百科全書、田中 彰)

さらに天皇崇拜を強め、徹底化したのは教育勅語の発布(明治二三年)であつた。「勅語」とは「明治憲法下で、天皇が大権に基づいて直接国民に発した意思表示の言葉」(明鏡国語辞典)である。この「天皇の直接のお言葉」を

子どもたちは一語漏らさず徹底的に暗記させられ、その内容を血肉化させ日本の教育を完全に規制することになつた。勅語には一二の徳目があり、それらの多くは現実的、実践的な内容を含むものである。しかし、「勅語は大日本帝國憲法の下、天皇を君主、国民を臣民とする国家観を補強する目的でつくられた規範」(「日本経済新聞」二〇一七年四月九日)であり、後の「戦時動員体制」との関連を考へるならば「天皇崇拜、戦争礼賛」への道になつていった、という意見には納得させられるものがある。この勅語の核心は「一旦緩急アレバ義勇ニ奉ジ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」の件である。小説家の高橋源一郎氏は口語訳で「いったん何かが起こったら、いや、はつきり言つと、戦争が起こったりしたら、勇気を持ち、公のために奉仕してください。と言うか、永遠に続くぼくたち天皇家を護るために戦争に行ってください。それが正義であり、『人としての正しい道』なんです」と述べている。意識とも言えるだろうが大筋において間違いないであろう。小学生の柔らかい脳にこれらを幾たびも注入されたならばついにその色にきれいに染まってしまうであろう。

由美は大正十年(一九二一年)の生まれである。ちょうど大正デモクラシーが終わる時期であつた。大正デモクラシーの理論的指導者は吉野作造である。吉野は宮城県北部の志田郡大柵村の生まれである。吉野の活躍があつたにも

かかわらず宮城における普通選挙を中心にした自由主義、民主主義運動は高揚しなかつた。むしろ隣県の福島の方が活発であつた。「動は反動を呼ぶ」の例えどおり軍部の圧力が強まり日中戦争、太平洋戦争へと坂道を転がるようにして突き進んでいった。当然ながら国内では国民の思想、教育統制が強化されていった。国民の多くは「天皇崇拜と戦争礼賛」のプロパガンダを受け入れざるを得なかつた。

由美はこの時期、多感な年齢を過ごしている。とはいつても「お上の命令」を疑わず、素直に受け入れるということであつた。それだけに彼女の脳細胞は国のプロパガンダに染められ易かつたと言えよう。生活の端々に天皇への崇敬の念を示すものが現れた。それは彼女が結婚し、子どもが生まれてからも変わることなく、むしろ強化されていったに違いない。子どもは母親の影響を強く受けて成長をしていく。東彦が誕生から幼児期に至る過程で、一番強く影響を受けた存在は間違いなく母親であつた。母親の天皇崇敬の念がどのように息子に伝わつたかは明確ではない。しかし、何かしらこの世の偉大な存在、人間離れをした摩訶不思議な存在者として彼の脳裏に刻み込まれたに違いない。それが天皇の姿を見た途端の「天皇陛下に手がある」という驚きの叫びであつたに違いない。おとなにすれば誠に荒唐無稽な表現に聞こえただろう。しかし、三歳過ぎの幼児にはそれが偽らざる正直な、そして考え得る最大の語彙

だったのだろう。

由美たちの一行が始発の長町停留所から電車に乗り込んだ時、国鉄の長町駅の時計は三時五分であった。既に停留所には長い列があつたが、由美たちは幸いにも座ることができた。電車が発車する時には車内は七割ぐらいの乗客であつた。電車の窓は運転台の一枚を除いて全て板張りであつた。車内は薄暗く、それだけに余計に暑さを感じられた。車掌の中には履くものがなく裸足の者もいたと言う。

仙台の町は昭和二十年七月十日未明にB29の爆撃により中心部は廢墟と化した。しかし、市電車事業所や倉庫は焼失を免れた。五一両の市電も奇跡的に助かった。復旧作業も素早かつた。驚くことに空襲の翌日には荒町と長町間で運転が再開されていた。架線の損傷がひどかつた荒町と仙台駅前間も八月三日には運転を再開している。同月二八日には全線の復旧が終了している。

乗客が増えるにつれ車内には蒸し暑い空気が充滿していった。あちこちで手のひらを使って扇ぐ者が続出した。その暑さもあつてのことか何かしら得体のしれない興奮が車内を支配していた。そこかしこからくぐもつた話し声が聞こえてた。そんな激んだ空気を払うかのように、由美の斜め向かいの若い母親が胸をただけ、豊満な白い乳房を手で取り出すと子の口に持っていた。一歳ぐらいと思われ

る男の子は勢いよく乳首に吸い付くと音を立てて乳を飲み出した。その子の乳を吸う音が周りのおとなの気持ちを鎮めたようだった。

「元氣な子だごと」

「本當だ、あのわらすはきつと丈夫に育つな」

由美の言葉に里久が笑顔で応えた。そして膝の上の玲子の顔を覗き込んだ。家を出る前に授乳をしたためか玲子は穏やかな顔で眠っていた。

「玲子はおとなしくて手がかからず助かるね」

「お陰様で、ありがたいこつてす」

「んだけど電車随分込んできたつすね」

「姉ちゃんの言うとおりでがす。この調子だと五橋までは超満員なるね。やつぱり天皇陛下さまがござらつしやるとなるとみんなの気持ちは格別だからなあ、取る物も取り敢えず駆けつけるっていうのが人情だすつべ」

義理姉の里久の言葉に由美は大きく頷いた。

「父ちゃん、天皇陛下下つて本當に歩けるんだべか」

「そりや歩けるべつしや。だけどおらだづみだいにいつも歩くわけではねえべ。大体はお召し列車か、お召し車を使うんだべな。あど、白馬に跨がつて行幸や閱兵もするべ」

斜め向かいの親子が額の汗も気にせず話している。

「父ちゃん、その白馬つて何つしや」

「それは陛下が可愛がつていつらしやる馬のことだ。真白

な毛並みなんで白い馬、白馬つて言うんだよ。名前は何て言つたつて」

その父親は連れの男に話しかけた。

「確か白雪つて言つたんじやねえかな」

「ところでボウズ、なんでおめえは天皇陛下が歩けるか、何て聞くんだ」

連れの男が男の子に問いかける。

「昨日、学校の先生に言われたんだよ。ようく天皇陛下のこと拝んでこい、本當におれだづと同づかつて」

「先生の言うことは間違つていねえな。おれだづて現人神と言われる天皇陛下が本當におれだづと同じか確かめてえ気持ちでいっばいだもんな」

「おじさん、おれだづ現人神つてよく聞くんだけど天皇陛下は本當に神様なの」

「春男、ちよつと前までだつたらそんなこと言つたら特高か憲兵に引つ張られたど。でも戦争に負けて民主主義になつて自由になつたお陰でおめえもおめえのとつあんも助かつているわけよ。話すつこに返るけど神様つていうのは目に見えねえけどいるのよ。そすて人間が善いごどすているか悪いごどすているかよく見ているんだ。良いごどすている人には必ずお恵みをくださる。悪いごどすている人には罰を与えるんだ。天皇陛下は姿は人間だけど本當は神様だつたというわけ。陛下は神様と同じように人間の

善悪をちゃんと見通している。神様と違うのは悪い者に対し罰を与えず、善いことができるように絶えず導いてくださつていふというこよ。そすてわれわれ民がちゃんとおまんまを食え、安心して暮らせるようにいづも目配りなすつていふわけだつちや。だからとても尊いお方なんだよ」

「ふうん、なるほどね。そうすると天皇陛下は見た目は人間だけど中身は神様だというわけだね、おじさん」

「そうだよ。なかなか賢いわらすつ子だ、おめえは」

「だけど、先生が言つていたんだけど戦争に負けてから天皇陛下は神様でなく人間に還つたと言つていふだけど、何でつしや」

「おめえもゆるぐねえな（甘くないね）。いいが、和尚さんのことは知つていふな。和尚さんは厳しい修行を積むと最後は仏様になる。いいが、仏様は神様と似たようなものだ。その仏様が何かの拍子にまた和尚さんや人間に還ることがある。難しい言葉で還俗と言ふんだ。天王陛下もちよつとこれと同じことなわけ。神様からもう一度人間に還つたというわけ。今回の行幸のわけは、人間に還つた挨拶を国民にするためだねえがど、おれは思つていふだよ」

「それにな、この度の戦で負けてしまつたべ、その責任を取つて人間に戻つたということもあるんだ」

「ううんなるほど、おじちゃん頭がいいねえ。よくわかつたよ」

東彦はその話じつと耳を傾けていた。その目はキラキラと輝いていた。何か得心がいったのかも知れない。八月の強い西日が電車を覆っている。その光の波をかき分けるように電車は車輪の音を響かせながら進んでいった。窓に打ち付けられたあちこちの板張りの隙間から光線が鋭い放射となって車内を射ていた。その細い光線の中に細かい粒子が緩やかに浮いていた。蒸し暑さに耐えかねてか子どもたちの泣き声やおとなたちのいらいらした声があちこちから起こり始めた。

窓から入ってくる風が急に涼しくなってきた。そして、運転台からの風景が広々として来た。車輪の音も大きくなり何かに反響しているようだった。電車は広瀬橋を通過しようとしていたのである。広瀬橋は広瀬川にかかる我が国最初のコンクリート製の橋である。運転台の開いた窓、そして板窓のわずかな隙間から川風が車内に流れ込んで来たのだ。「ふーっ」という安堵の溜息が車内で起こった。

「ああ、涼しい」とか「生き返った」などというほっとした声が車内に響いた。板打ちの隙間から見える川の流れば川幅いっぱいには滔滔と流れていた。長雨にもかかわらず川の水は澄んでいた。広瀬川を遡上する鮭は古来より有名で、広瀬川、名取川の下流域を領地としていた伊達家の家臣粟野氏は、毎年のように初鮭を伊達氏に献上していたと言う。空襲で廃墟となったこの年の秋にも間違ひなく鮭は遡上し、

に違ひない。あつさりとその提案を受け入れた。そして、一行の者たちにも伝えた。運転台の近くから大声がした。

「おれんところは二人も息子を取られ、亡くすてすまった。天皇陛下の命令でだ。そすて息子だつは天皇陛下万歳と言つてすんづまった(死んだ)。陛下に謝つてほしいなんと言う大それたことは言わねえ。だげど、気の毒すたな、というぐらいのことはほしいな」

その声が終わると、涙声が聞こえた来た。男は悲しみを蘇らせたのだろう、さめざめと涙を流した。

車内に静寂さが伝わっていった。

「みんな多かれ少なかれ悲しみをしょっている(背負っている)。それを陛下に聞いてほしいだけなんだ。陛下を責める者はいやしねえさ。陛下だつて悔しさや、苦しみを憶えて行幸されているに違ひない。われわれ国民はそここのころを汲み取つて上げないと申し訳ない」

「小林じいの言うとおりで。人を責めても残るのは空しさだけだ。おれだつは何かしらの支えなしには生きていけない。陛下がわだすだづ(私たち)を励ますにいらつしやるその気持ちがありがたくいただかなくちやなんねぞ」

ハルは誰となく話すのだった。

老朽化した市電は頼りげなく、満員の車両をきしませながら進んでいった。仙台空襲をかううじて逃れて来た電車

焼け出された多くの市民の胃を満たしてくれるに違ひない。広瀬橋を渡つた電車は河原町で停車した。乗客が乗り込んできたが、ほとんどすし詰め状態であった。乗車口に片足を突っ込んでいた男性が大声で「もちよつと奥に行つてくれ」と叫んだが、隙間はできなかつた。運転手は大声で「すぐ次が来るから降りて下さい、お願いします。それと乗車される方は後ろ、車掌台のある方からです。降りる方は前方の運転台からです」と叫んだ。後方の車掌も同様なことを叫んでいた。この当時は「車掌台を乗車口、運転台を降車口とし、運転台では現金を受け取らない方式を実施し」ていた。男性は「チエツ」と不満を漏らしながらも踏み入れた片足を不承不承降ろした。

「おがちゃん(おかあさん)五橋停留所で降りるつて言つたけど、考えて見たらその手前の荒町で降りた方がよぐねえべすた」

「なすてや」

由美の問いかけに母のハルは顔を向けながら言った。前髪がほつれ、額の辺りにうつすらと汗がにじんでいた。

「少しでも早く電車を降りた方が子どもたちのためにいいんでねえがと思つて」

「それは良い考えだつちや。私も賛成だす」

「うんじゃ、そうすつか」

慣れない満員電車の人いきれにハルも内心辟易していた

である。その上、かなり古びておりいわば満身創痍といつてもよいほどの車両であった。新車である新潟鉄工所製作のボギー車五輛が購入されるのは翌年の一二月であった。河原町停留所から荒町停留所まではあと四つの停留所があった。時間にすると十五、六分の距離であった。由美たちが荒町停留所で降車したのは正解であった。降りた東向かいが荒町商店街通りで、停留所の目の前であった。子どもや老人連れには便利な場所であった。この停留所で乗客の三分の一ほどが降車した。降りた乗客はバラバラと勝手に広がって歩いていった。走行している車はポツリポツリとしか見られない。リアカーや馬車がまだ幅をきかせていた。

「ああ、生き返つた」

「空気が肺にしみこむようだ」

降りた乗客の中からほつとした、そして明るい声が上がった。荒町停留所の二つ手前の愛宕橋停留所から荒町停留所にかけて道路は九十度ちかく右へカーブし、坂もかなりの上り坂となっている。二つの停留所の間には土樋停留所があり、その停留所から十程先の深い崖下を広瀬川が流れている。荒町停留所からは日に光る川面がゆつたりと見え、その向こうに大年寺山と愛宕山が並んで見える。山と言うより少しの高めの丘という感じであるが、山全体が盛り上がるような緑に覆われて見る者の目を慰め、休ませしてくれる。その山から降りた風が広瀬川の川面を渡る時に

馥郁たるオゾンをつつぷりと吸収し、土樋から荒町の道を吹き上げてくる。

「なんだか風に葉緑素が含まれているみたいに良い匂いがするよ、深呼吸してみよう」

「本当だ。うめえ風だ。天然の風だよ」

「天然の風、なかなかうまいこと言うな。みんな深呼吸してみろ、肺の中がきれいに掃除されるぞ」

その言葉に連れられ、愛宕山方面に向かい多くの者達が深呼吸を始めた。それぞれが生真面目に手を広げたり縮めたりする様がほほえましかった。

「ほらみんな集まれ、勝手にいぐんでねえぞ」

ハルの大声で一行は我に返ったようにして目をぱちくりとし、ハルの回りに集まって来た。

「見たとおり大変な人ばかりだ。まずわらすつ子だづをすつかり見張つていねえだめだぞ。人さらいがいるつて言うから。気を付ける上にも気を付けないとだめだぞ」

ハルの言葉に母親たちは大きく頷いた。

停留所の向かい側に荒町が東へと広がっている。七夕飾りが角から垣間見えていた。

「あつ、七夕さんだ」

目ざとい東彦が大声で叫んだ。まるでその声が届いたかのように吹き流しが揺れた。少し翳ったとは言えまだ十分に強い西日が一行に降り注いでいた。午後四時頃であった。

行幸が通過する予定時刻まで一時間半以上あった。もちろん一行には時計を持っている者など皆無であった。しかし、彼ら農民は十分程度の誤差で時刻を言い当てる能力を持っていた。見渡すと一行と同じように複数、あるいは団体で天皇を奉迎しようという人々で街はいっぱいであった。

「すかす、戦争が終わって間もないと言うのによくぞ七夕飾りをすたもんだなあ。仙台七夕は田の神を迎えて豊作を祈ることだそうだが、今年は現人神の天王陛下さまもお迎えするんだ。きつと今年は豊作間違いねえな。ところで天皇陛下の行列までにはちよつと時間がある。タバコにすつべが」

ハルの声に一同「んだ、んだ、そうすつべ」とか、「わらす子だづも腹すかすつべ、ちよつどいいあんばいだ」などの声が返ってきた。うまい具合に家並みの一画が空き地になっていった。そこに持参して来た使い古しの畳表を四枚ほど敷いた。広げた畳表の真ん中に茹でたトウモロコシやサツマイモを並べた。男衆たちは腰の帯に差し込んだキセルを取り出し、刻みタバコを詰め込み、マッチを擦って火を点けた。目を細めて吸い込むと空に向かってフーッと息を吐いた。紫煙が空中に漂い、直に青い空に溶け込んでいった。

「あーつ、うめえな」

「電車だったから我慢すてたから尚更うめんだべえ」

「この一服が長生きの薬になってんだべ。ところで天皇陛下もタバコ吸うだべか」

「そりゃ吸うべすた。こんなうめえもの吸わねえのは嘘だべ」

「うんだげど陛下が吸つたどご見たごどねえな、おらほうだづ（私たちは）」

「そんなのあたりめえだすべ、おれだづ陛下とは挨拶交わすどころが今まで会つたこともなかんべえ」

「そりゃそうだ」

そこでみんながどつと笑った。子どもたちもつられて笑っている。ちよつどその時、風がこの小さな空き地を吹き抜けていった。由美がめくり上がろうとした畳の端を押さえた。風が過ぎるとひよいと西の方に目をやった。空襲から免れた町並みの向こうにはぼつり、ぼつりと爆撃でまだらに黒くなったビルが見えた。そしてその先に青く染まった丘陵のような青葉山が意外と近く迫って見えた。由美は改めてB29爆撃の恐ろしさと戦争の空しさを知った。

「どこ辺りで陛下を迎えたらよがすかね」

「小林じいはどこら辺がいいと思いますかね」

「いや、おれはこの辺は全くわかんねえからハルさんの方で決めてけさいん（ください）」

「由美、おめえは裁縫学校さ通つてだからこの辺のことは明るいべ。どこで陛下を迎えたらよかんべ」

「かあちゃん、荒町で迎えたらいいんでねえすか。ちよつど七夕飾りも見られるし、子どもだづも喜ぶと思います」

「小林じい、由美の言うことでなじよですか」

「ほれ（それ）でいいが」

小林じいのこのことばで奉迎の場所は決まった。

「ほら、子どもだづ、今度は七夕見さいぐぞ、みんなで力を合わせ片付け始める」

ハルの声で子どもたちはめいめい片付けを始めた。東彦たちは「七夕だ、七夕だ」と、喜びの声を上げながらぐるぐると回っている。

この年の一二月七日、天皇は広島巡幸を果たしている。この広島は、一年四ヶ月前に人類史上最初の原爆投下をされた都市である。投下から四三秒後、地上六〇〇以上空で目もくらむ閃光を放つて炸裂し、小型の太陽とも言える灼熱の火球を作つて地上を襲つた。火球の中心温度は摂氏一〇〇万度を超え、爆心地周辺の表面温度は三、〇〇〇〜四、〇〇〇度に達した。市民や軍人三五万人のうち一四万人がその年の一二月までに死亡した。実に四〇割に当たる。そして街は瓦礫の焦土と化した。その後、「七〇年は広島に草木一本も生えない」と言われた。そういう風説が流れ、広島市内へ足を踏み入れることをはばかる状況が当時であった。そういう中での行幸であった。

天皇の広島巡幸については地元の熱い要望もあつてのことと言う。しかしながら、表面に出ないまでも、今まで肉親を亡くし自らも傷つき、愛する故郷を全くの焦土と瓦礫に変じた事態に無念や怒りが渦を巻いていたと思われる。その怒りの矛先が天皇に向いてもおかしくなかったであろう。このような懸念は天皇自身、そして側近も持たれたであろう。元侍従長であつた入江相政は「広島市に入られるまでは（陛下は）何か物思いに沈んでおられるようにお見受けした」と語っている。

ところがこれらは全くの杞憂であつた。爆心地に近い護国神社あとの広島奉迎場では「五万人の国歌大合唱が感激と興奮がとどろき渡る。陛下も感激を顔に表され、ともに君が代をくちずさまれた。涙・涙・涙・感極まつて興奮の涙が会場を包んだ」と中国新聞は報じている。しかし、より以上の感動と興奮はこの後に来る。天皇は、浜井市長の奉迎に答えられ広島市民に対し巡行中で最も長い言葉を述べた。

戦前にも巡行は行われていた。しかし、それは天皇が臣民の様子を観察する性質のものであつた。多くの国民は天皇の姿を見るところか肉声も聞くこともまれであつた。まさに「雲の上の存在」であつたのである。その雲の上、現人神であつた天皇がまだ香りを発する白木のお立ち台からマイクに向かい、直接市民にお話をされたのである。

これはこの犠牲をムダにすることなく、平和日本を建設して世界平和に貢献しなければならぬ」と述べられ、以後昭和二六年、四六年とつごう三度広島にお見舞いの言葉かけられるわけですが、戦争終結に当たつて、原爆投下の事実を陛下はどうお受け止めになりましたのでしょうか、おろかがいいいたします」

この質問は国民の多くが求めていたものである。秋信氏の質問は無駄のない極めて論理的かつ真摯なもので、その上天皇への敬意を失うことのないものと読める。

後日、氏は「広島の記事として、もう少し別な言葉で質問するつもりだったが、あのような表現になつた。日本の記者が、被爆に触れないわけにはいかない。原爆をタブーにしてはならないという思いであつた」と述べている。質問は予告されたものではなかつたと言う。しかし、氏は当初から「原爆投下」について質問しようという腹づもりだつたようだ。肝の据わつた、まさに記者鏡の発露と言える質問でもあつたと言よう。だが、これ以降、皇族の記者会見の場で、原爆にかかわる質問は、秋信氏以外はでない。

なお、天皇の発言に対し、宮内庁は「ご自身としては原爆投下を止めることができなかつたことこそ遺憾に思われて『やむを得なかつた』のお言葉になつたと思う」という異例の声明も出している。また皇太子（明仁天皇）も記者

この時の巡幸を含め以後の広島訪問は六回に及ぶ。広島に対する格別な思い入れがあつたのではないかと推測される。そうはいつても、天皇のこの市民向け言葉を現在の目で読むとはやり何か他人事のように人情味も乏しいように思える。しかし、これを聞いた広島市民は幾度も津波のように沸き起こる感動の声、万歳の声で応えたのである。天皇も右へ左へ中央へ、そして近く遠くへと右手に持ったソフ帽を幾たびも振つたのであつた。

また、この天皇の言葉は、昭和五十年十月の公式記者会見での質問に答えた「原爆投下はやむを得なかつた」という相手突き放したような表現、そして国民と交えない距離間が酷似しているような気がしてならない。国民の方が天皇への感情の入れ込みが激しく、むしろ天皇の方は醒めているように思えるのである。

この公式記者会見で質問をしたのは中国放送の秋信利彦記者であつた。氏は、中国新聞記者、論説主幹であつた大牟田稔氏と共に、原爆小頭症患者の实情を日本社会に初めて知らせ、この患者や家族の結束を促し、国に補償を求め、核兵器廃絶を目指す「きのこ会」を発足させ、これを支えた。その質問内容は次のようなものである。

「天皇陛下におろかがいいいたします。陛下は昭和二二年一月七日、原子爆弾が焼け野原になつた広島市に行幸され『広島市の受けた災禍に対しては同情に堪えない。われわれ

会見で「とっさの場合、こちらの気持ちを十分に表せないこともある」と述べている。

仙台巡幸第二日目の八月六日は二年前の原爆投下の日であつた。おそらくこのことを意識して天皇を迎えた仙台市民は少なかつたと思われる。広島は惨状についてはまだ十分に国民に知らせられていなかったからである。それどころか市民の多くはB29の爆撃によって廢墟と化したわが町の復興に忙しかつた。この瓦礫の街の中を通り抜けて走る天皇のお召し車は風景としては強烈な印象を市民に与えたと考えられる。荒町は瓦礫の街と災害を免れた境界に位置していた。元奥州街道の本道であつた趣を十分に残り、落ち着きのあるそして老舗と寺院の並ぶ伝統的な街であつた。そこに林立する五彩の吹き流しや鶴飾りが揺れ動くさまはいかにも「杜の都」に似つかわしかつた。

由美たちが荒町商店街に入った途端、道の両側は既に行列となつて視界の外れまで続いていた。何とかその列の間を見つけてもぐりこむことができた。

「天皇陛下はどんな服をお召しになつてこられるのかな」

「それはやはり袴だべや」

「袴っていうごどはねえべや。それは侍の服装だべや。陛下はもともとお公家さんだからお公家さんの服装だべや」

「ところで皇后さまもいらつしやるのがや」

「それはちよつと聞いていねえな」  
 「やはり皇后さまもござらっしゃるべ。なんと云つても夫婦ご一緒というのが自然な姿だからな」  
 天皇を迎える市民たちの好奇心は止むことがなかった。ただ誰もが天皇が来る方向である西の方向に身体を向けていた。

「あとのぐらいで天皇陛下は来るのっしや」

もうすぐ四歳になるうとする東彦には待つ時間は長い。この言葉を何回言つたであらうか。それでも我慢できたのは普段見たことのない人並みであり、七夕飾りであった。おとなたちにとつても同様であった。戦争末期、敗戦後の二年間というのはいわば墨絵のような風景であった。ところがここ荒町に来てその風景画一変した。人々の服装も晴れやかであり、色彩にあふれた七夕飾りが風に揺れ、ざわめきも明るい笑い声で満ちていた。

その時であった。何やら地響きに似た人の盛り上がるようなウオーという声が次第に届いてきた。

「来たぞう、陛下がいらつしやつたぞう」

誰が叫んだ。それにつられて人々が一斉に西の方に身体を向けた。中には伸び上がる者もいた。

「陛下だ、陛下だ。陛下がいらつしやつたぞう」

「いらつしやつた、いらつしやつた」

その言葉が伝染でもしたように次々と発せられてくる。

がら叫んでいる。背中の玲子は何事かが起こつたように泣き声を上げている。その声は由美には届かないようだった。中には両手を合わせ、涙を流している老婆もいた。車列の何両目であったか定かではない。その車の中で手を振る人物を見た。由美の周りから「陛下だ、陛下だ。天皇陛下だ」という声が一段と明瞭に聞こえた。その瞬間、東彦が叫んだ。四歳に近い子の言葉としては極めて明瞭であった。

それを耳にした由美は、一瞬にして我に返り、慌てて東彦の口を手のひらでふさいだ。  
 車列の最後尾の車が視界から消えた。しかし、人々の興奮が醒めることはなかった。

「何だかあつという間だつたね」  
 「んだでも、初めて天皇陛下を見ておら、こんな幸せなごどねえべすた。もういづお迎えが来てもよがすた。この世に未練はないべすた」

「んだ、んだ。やつぱり天皇陛下はおらだづ平民とは違うな。風格があるし、身体から光を発しているみたいだ」  
 由美たちの連れの年寄り連中が興奮を交えて話し合っている。

「陛下がわだすの顔を見たよ。わだすは身体が震えて止まらなくなつてすまつたよ」  
 小林じいの嫁が震えた声で話している。確かに身体がまだ小刻みに震えていた。

人々はそれにつられるようにして道の真ん中に向かっていく。それを警官や整理員らが必死に静止している。「天皇陛下に恥ずかしいぞ」と、そのうちの誰かが大きな声で叫んだ。その声はまるで矢のように鋭く、そして澄明に群集の中を過ぎ去つた。すると、その群集の中から「陛下がご覧になるぞ」という声が飛んだ。すると「下がろう、下がろう」という声が自然発生的に起こり、飛び出した群衆が元の位置まで下がつていくのであった。まるで見えない手で操られているようであった。

お召しの黒い車が角を曲がつてゆつくりと近づいて来た。

「みんな陛下がござらつしやつたぞ。よぐ拝むんだぞ」

ハルが周りの近親者や隣人たちに声をかけた。

「東彦、かあちゃんの前さ來い。よつと天皇陛下を拝むんだぞ」

そう言いながら由美は東彦の身体を前に押し出した。お召しの車が次々と角を曲がつて近づいて来る。それにつれ「万歳、万歳」という声も大きく聞こえてきた。それは声というより巨大なラツパ管から天に向かって吹かれる祈りのようでもあった。いつしか幼い東彦もその興奮の渦の中に巻き込まれて「バンザイ」と叫んでいた。万歳の声のうねりに吹かれたように七夕飾りの吹き流しが揺れた。車列の先頭車がとうとう由美たちの前に来た。人々の興奮は頂点に達した。由美もその車列に向かって両手を高く上げな

「わだすも同じです。震えましたよ。陛下がわだすの方を見てにこつと笑つたんですから。こんな畏れ多いこともあるんですね。今晚眠れねえがもすれねえ」

馬方の乙つつあんの嫁であった。

「乙つつあんのおつかあの言うごとはよぐわがらす（わかる）。おらあも同じだすべや」

荒熊の嫁が大きく頷いている。

「とにかく、おらだづみんなを幸せな気分にするくれたのはさすが天皇陛下だすべや。ありがたいたいことだ、ありがたいたいことだ。村に帰つたら他のみんなにも報告すねくちや」

小林じいの言葉にみんなは大きく頷いた。

その時であった。由美たちのグループの隣から大声が聞こえてきた。

「ここまで来てなんでおめえはそんな不敬なことを言うんだ。恥を知れ」

「わだすは何も恥ずかしいこととは思いません。大事な大黒柱の夫を持つていがれた妻の苦しい、辛い思いです。わだすの言うごどは、夫を亡ぐすた女みんなの気持ちだども思います」

「馬鹿こけ、そんなのはおめえだけの考えだ。他の人だつは名譽なことだと思つている」

「んだどもわだすの気持ちはどうすても収まらないです」

「何があつたんだや。随分と険悪な雰囲気だなや」

「小林のじい、どうやらあのおつかあが陛下に文句を言ったらしいよ」

「何て言ったんだ」

「いやよくわがんねえだすとも、『陛下のお言葉がほしい』みたいなこと言ったらしいよ」

「竹アン、たいした問題じゃねえと思うけど」

「それが、『天皇陛下がお車から降りて一言お言葉をいただければありがたい』と言ったらしいんですよ。どうも『お車から降りて』というのがひっかかったらしいです」

「なるほどな。人間は欲が強いからな。お顔を拝んだだけでは満足できず、お言葉までほしくなったか」

小林じいは顔を少しゆがめて「遅くなると足下が暗くなる。そろそろ帰るか」と一行を促した。

帰路に就く人々が荒町商店街の道にあふれていた。先ほどの秩序のとれたさまとはまるで違っていた。しかし、人々の会話は和やかで幸せに満ちているように見えた。弱くなった日の光が西の空からゆっくりと届き、街の上空をほんのりと赤く染めている。遠くでカラスの群れの声が聞こえた。頭上を覆っていた七夕の飾りも今はもう力なく静かに垂れていた。まるで今日一日の厳しい労働に精気を抜かれてしまったような風情であった。しかし、吹き流しは西日を受けて五彩に輝いていた。由美の背中の子もまた眠りに落ちたよう静かであった。

「かあちゃん」

ぼんやりとしていた由美は、東彦の呼びかけに気付かなかった。

「かあちゃん」

東彦が声を強めた。

「あつ、なんじよすた、東彦」

「かあちゃん、あなの、天皇陛下っておれだづと同じ人に見えるね」

「んだな、やつぱり同じ人だったんな。安心すたか」

「うん、安心すた」

「よがったな」

そう言うと由美はつないでいた手の力を強めた。東彦の柔らかかな、そして温かな感触に目頭が熱くなった。

「よがったな。かあちゃんも安心すたよ。東彦だづの時代には戦争はねえがらな。もう兵隊にとられることはねえべ」

母のその言葉に東彦は母の顔を見上げ、こくりと頷く。そのまっすぐな東彦の表情に由美は「うん、うん」と応えた。由美の左目からぼたりと一粒の涙が落ちてきた。東彦は嬉しそうにつないだ手を大きく前後に振った。そして「うちでも七夕さん作ろう」と大声で叫んだ。いつの間にか西の空が茜色に染まっていた。

(完)

※参考資料、文献

- ・ 河北新報（一九四七年八月六日、七日付け朝刊）
- ・ 「仙台空襲」 編集 仙台「市民の手でつくる戦災の記録」の会
- ・ 「忘れかけの街・仙台 昭和40年頃、そして今」 河北新報出版センター
- ・ 「せんだい歴史の窓」菅野正道著 河北新報出版センター
- ・ 「昭和天皇実録」巻十 宮内庁